
最新鋭機

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最新鋭機

【Nコード】

N6618J

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

天才パイロットオルレアン大尉は最新鋭戦闘機のテストパイロットに選ばれた。実はその最新鋭機は。実際にことうした話はあるかも知れませんが。なお星河の覇皇のお話のブラウベルグ登場前の状況を舞台にしています。

第一章

最新鋭機

ジャック＝ド＝オルレアン大尉は空軍でも名うてのパイロットである。その技量はまさに天才的であり空軍の中でもトップガンと言ってもいい。

その彼であるが軍人らしく背は高く引き締まった身体をしている。薄茶色の髪に緑の目、それに涼しげな顔立ちが俳優の様である。

それで空軍の軍服やパイロットスーツを着ているのである。もてない筈がない。

実際に彼は結婚しているのに女の出入りが絶えない。それで妻のマリーはいつも焼餅を焼いている。

「あなたがもてるのは私もいいことよ」

「けれど浮気は駄目ってことか」

「そうよ。今迄どれだけ浮気したのよ」

そのまだ幼さの残る可愛い顔を怒らせての言葉だ。女にしては背が高くスタイルもいいがその顔立ちは淡い金髪とライトブルーの目に童顔である。そんな顔をしているのだ。

「どれだけよ。言ってみなさいよ」

「今迄食べたパンの数よりは少ないと思うんだが」

「呆れた」

「思わず言ってしまった言葉である。」

「そんなことしてたら何時か天罰を受けるわよ」

「汝姦淫するなかれか？」

「そうよ」

モーゼの十戒の言葉である。

「何時か私のフライパンだけじゃ済まないわよ」

「あれも相当痛いんだがな」

「じゃあ少しは反省しなさい」

こんな話はいつものことだった。だが彼は反省なぞしない。そのジャックに対してある日こんな話が来たのである。

「最新鋭機のですか」

「そうだ。テストパイロットをしてくれるか」

「こう上官に言われたのである。」

「今度な」

「最新鋭機にですよね」

「そうだ。新たに開発されているのは知ってるな」

「はい」

その上司に対して答えた。その話は彼も聞いていた。

「何でも相当凄いのらしいですね」

「性能が半端ではない。我が国が複数の同盟国と協同して開発したものでだ」

「そうでしたね。それでかなりのものだとか」

「そのテストパイロットになってもらいたいのだ」

「また言ってきたのだった。」

「それでいいか」

「いいとかじゃなくて驚きですよ」

軍人にしてはかなり砕けた言葉で返すのだった。

「私ですか。そのはじめてのパイロットに」

「それでいいな」

「ええ」

返答は完結だった。

「是非やらせて下さい」

「よし。では頼んだぞ」

こうして彼は最新鋭機のテストパイロットになった。ただしこのことは軍人として他言しなかった。軍事機密を守るのは当然のことだからだ。

それでその日が来た。もう滑走路に出されているその最新鋭機を見て。既にパイロットスーツに着替えている彼はこう言うのだった。

「何かこっち側の機体じゃないみたいだな」

「そう思いますか？」

「っていうかこれあれじゃないか」

その機体を見て周りにいる整備のスタッフに対して言った。

「太平洋連合のやつじゃないのか？」

「あの連中ですか」

「そうだよ、連中のだよ」

ジャックは欧州連合の軍人だ。欧州連合は太平洋諸国の集まりである太平洋連合と対立関係にある。それが当然ながら軍事関係にも及んでいて冷戦に近い状況となっているのだ。

その彼等の機体に似ていると。ジャックは思ったのである。

「何か翼の辺りが特にな」

「言われてみればそうですね」

その整備スタッフの指揮官である将校が彼の言葉に頷いた。

「この機体は」

「そうだろ。向こうの技術を盗んで開発したのか？」

「こつも考えたジャックだった。」

「こつちの技術だけじゃなくて」

「どうなんですかね。それで大尉」

「ああ」

その整備将校の言葉に伝える。

「そろそろですよ」

「ああ、乗るか」

こんなやり取りの後でその機体に乗ってテスト飛行をはじめると暫くして機体に通信が入って来たのであった。その通信は。

第二章

「オレルアン大尉」

「はい」

このテストの最高責任者である將軍からだった。

「どうだ、乗り心地は」

「いいですね」

まずはこう答えるジャックだった。

「結構快適ですよ」

「そうか」

「そうしたことにも気を使って開発したんですか」

ジャックはそう考えたのだった。実際にその乗り心地はこれまで彼が乗ってきた欧州連合の機体のどれよりもいいものだった。

「いいことだと思います」

「そうか、わかった」

通信の將軍派彼の言葉を聞いて頷いた。

「そうなのか」

「はい、かなりいいですよ」

「それではだ」

將軍はさらに彼に言ってきたのだった。

「操縦性はどうだ」

「これも凄いですよ」

これも文句なしに褒める彼だった。

「動かしたらそれがそのまま出ますから」

「それもか」

「ええ、それに運動性能も」

このことは自分から言う彼だった。

「凄いですね。最新鋭機といってもこれは」

動かしてみる。ジグザグに動いたり何度も宙返りをしたり。それ

も彼がこれまで乗ったどの機体よりも優れているものだった。

「凄過ぎますよ。ただ速度は」

「どうだ？」

「マツハ3は出ますけれど」

これについては言葉が付け加えられた。

「加速が遅いですね。ただ高度でも性能が維持できるのかどうか見てみます」

「うん、あがってくれ」

「はい」

こつ応えてだった。実際に上昇してみる。すると二万メートルでも性能は維持できる。これにはジャックも流石に驚いてしまった。

「低空でも高空でも性能が変わりませんね」

「同じか」

「いや、こいつは凄い」

純粹に驚きを隠せなかった。

「こんな技術うちにあっただんですね。凄いですよ」

「そうか、わかった」

將軍は彼の言葉を聞いて頷いた。そうしてだった。

「それではだ」

「次は何ですか？」

「テストファイトをしてもらいたい」

こつ言ってきたのである。

「それをだ。いいか」

「本番つてわけですね」

それを聞いたジャックの顔が自然に引き締まる。

「これが」

「いいな」

「望むところですよ」

不敵に笑って將軍に言葉を返す。とはいってもその表情は向こうにはわからない。モニターは今ほコクピットになかったからである。

「じゃあ撃墜しますよ」

「期待している」

こういったやり取りの後で攻撃に移る。上方に宙返りをしてそのうえでその数機の敵機に向かう。相手は欧州側の現在の主力戦闘機である。

「俺が今迄乗っていた機体を狙うのは複雑な気分だな」

ジャックはその戦闘機を見て内心苦笑いになった。

「だがこれが仕事だからな」

そう言っただであった。早速撃墜に入る。そうして敵のポジションを狙う。

旋回し敵を惑わせようとす。相手は左に動いてきた。

第三章

ジャックはそれを見て乗機を下にやって上を完全に押さえた。そのうえで照準を合わせる。

バルカン砲のそのボタンを押す。当然本物ではなくカメラである。その戦闘機の姿が撮影された。つまりバルカンで撃墜したのである。

「よし」

ジャックはそれを確認して微笑んだ。

「やったな。俺の勝ちだ」

「まずはおめでとう」

それを聞いた將軍から勞いの言葉が来た。

「それではだ」

「それじゃあ？」

「今度は逃げてくれ給え」

「逃げるっていいいますと？」

ジャックが今の言葉に首を傾げさせるとだった。撃墜したことになるその戦闘機達が向かって来て。そのうえでミサイルを放ってきたのである。

「なっ!?!」

「そのミサイルをかわしてくれ」

將軍は平然と言ってきた。

「いいな」

「なっ、やばい!」

彼は咄嗟にまた上に宙返りをした。それでミサイルをかわしてみせる。これには動かした彼ですら啞然とするものであった。

「この運動性能は……」

「やはりな」

それを見て冷静に述べた將軍だった。

「この機体の運動性能は想像を絶するものだな」

「？想像を絶する？」

今の將軍の言葉を聞いて首を傾げさせたジャックだった。言葉が自分達の国の機体について語るものにしては随分と冷めたものだったからだ。

それで首を傾げさせて。とりあえずミサイルをかわしたことに安堵しながら將軍に対して問うのだった。

「あの、今の言葉は」

「後で話す」

「ここではこう言うだけの將軍だった。

「後でな」

「そうですね。後で、ですか」

「そうだ。とりあえず今のテストは終わった」

それは終わったというのである。

「御苦労だった」

「そうですね。終わりですか」

「そうだ。では話は君が戻ってからだ」

何はともあれそれからだった。彼は着陸し軍服に着替えて將軍のところに来た。実に厳しい顔の初老の男が管制塔において彼に対して言ってきたのであった。

「まずあのミサイルだが」

「下手しなくても死んでましたよ」

彼はこのことには抗議めいて返した。

「私みたいな天才じゃなかったら一発でしたよ」

「そうだな。間違いなく」

「そうですね。何であんなことをしたんですか？」

「あのミサイルは信管を外してあった」

それがないというのである。

「だから万が一命中したとしても大事にはならなかった」

「いや、それでも死ぬ可能性は高かったですよ」

「君なら確実にかわせると確信していた」

今度はこう言う將軍だった。語るその顔が厳しいままである。

「君の技量ならばだ」

「俺ならですか」

「それ以上にだ」

眉を顰めさせいぶかしむ顔になっている彼にさらに話すのだった。

「あの機体ならな」

「そういえば閣下は」

ここでジャックは聞きたいと思っていたことを話した。

「何ですか？こっちの最新鋭機を見るにしては随分と他人事として話しておられましたけれど」

「それは当然のことだ」

將軍は彼の今の問いにこう返してきた。

「それはな」

「当然といえますと？」

「そうだ」

こう彼に話すのだった。今度は目をしばたかせて怪訝な様子になった彼に。

第四章

「あの機体は太平洋のものだからな」

「太平洋の!？」

「我が国の諜報部が情報を入手してきた太平洋側の最新鋭戦闘機だ」
それだというのである。

「今話題になっっているな」

「ああ、そういえば物凄いのが今太平洋でテスト飛行を受けて実戦
配備されることが決定しているそうですね」

「それは知っているな」

「ええ、まあ」

このことを知らない筈がなかった。彼にしる将校である。しかも
パイロットだ。それでこんなことを知らないのでは話にもならない
ことである。

それであった。応えて。さらに話を聞くのだった。

「それは知ってますけれど」

「それがあの戦闘機だ」

ジャックが先程まで乗っていたものだというのである。

「諜報部員達は必死に、それこそ命を賭けて手に入れてきたその最
新鋭機を出来るだけ忠実に再現したものがあれだ」

「そうですね。あれがですか」

話を聞いているうちに真剣な顔になっていくジャックだった。間
違いなく軍人の顔である。

「道理であっちのシルエットですね」

「太平洋連合があれを実戦配備していくと我々はそれに対抗
できる戦闘機を開発しなければならぬ」

「それで俺はあの機体に乗ってテスト飛行をしたってわけですね」

「そうだった。御苦労だった」

こうは言っても表情は変わらない彼だった。

「おかげで機体の性能が幾分かかった」

「あの性能は相当なものですよ」

それは実際に乗った彼が最もよくわかることだった。だからこそ言ったのである。

「はつきり言いましてこっちのよりも数段上ですね」

「上か」

「あの運動性能ですよ」

このことを話さずにはいられなかった。

「あれだけ凄いのはこっちにはないでしょう」

「そして速度もか」

「操縦性もよかったです。こっちの今の戦闘機じゃまず太刀打ちできませんね」

「ならばだ」

將軍はそれを聞いてだった。静かに話を続ける。

「こちらの最新鋭機はあの戦闘機よりさらに上のものをだな」

「何しろですね。数じゃ絶対に負けますから」

太平洋と欧州の人口と国力の差は恐ろしいまでに開いている。太平洋はそれこそ何十億もの人口があり国力も最早欧州の数倍に達している。それに基く差は洒落にならないものだった。

当然戦闘機の数もだ。尋常なものではない。それで性能まで差があつてはどうしようもないのだ。

だからこそジャックは言ったのだった。このことをだ。

「性能だけでも何とかしないと」

「その通りだ。だからこそ」

「はい、最新鋭機の開発を確実かつ迅速に行うべきです」

敬礼をして述べるジャックだった。これが最初のテスト飛行の話である。彼はそれからテスト飛行を担当した。

その結果として最新鋭機が計画にあげられ配備まで決定した。彼の功績であった。

ジャックは少佐になった。そのことはマリーにも伝えられた。だ

が夫の勤務のことを知らない妻はいささか能天気にかう彼に言うだけであった。

「最近浮気しなくてよかつたわ」

「浮気どころじゃないんだよ」

その最新鋭機のテスト飛行だけでなくパイロットして様々な意見を述べたりしている為多忙なのは妻に隠しての言葉である。

「それこそな」

「忙しいのね」

「毎日帰り遅いだろ」

このことを述べてみせた。

「本当にな」

「仕事で遅いのは結構なことよ」

またしても能天気と言う妻だった。

「それはね」

「まあそう思っておいてくれ」

「安心して」

笑って言ってきたマリイだった。

「それはね」

「安心してって何がだよ」

「それには一向に構わないから」

「言ってくれるな。俺が過労死してもいいっていうのかよ」

本気ではないがむっとした顔を作って言い返すジャックだった。

「そうなたら困るのは御前だろっ?」

「そういう人? あんたが」

しかしそのマリイは笑ったまま言い返してきた。

「過労死する様な人なの?」

「俺がそんな風に見えるか?」

するとジャックは軽い笑みで返してみせた。

「それ位なら遊び疲れて死んでやるさ」

「そうでしょ。だからそれは安心してやるさ」

「へっ、そう思っておいてくれよ」
「それでだけれど」

軽いやり取りを終えて話を変えてきたマリーだった。次に話すことは。

「今日の晩御飯だけれど」

「ああ、何だ？」

「グラタン作るわよ」

それだというのである。

「牡蠣のグラタンね」

「ああ、いいな」

牡蠣のグラタンと聞いて期待する笑みになるジャックだった。彼もマリーも牡蠣は好物である。結構食べる時の多いものでもある。

「じゃあそれを頼むな」

「チーズとガーリックもたっぷり使ってね」

「身体によさそうだな」

「だからなのよ」

だからこそ作るというのである。

「パイロットは体力がないとね」

「そういうことだな。じゃあ頼むな」

「ええ。それとワインは」

「白でな」

仕事を忘れて今は楽しい食事のことを考えるジャックだった。とりあえず太平洋連合の最新鋭機のことには忘れて。そうして今は食事に頭を切り替えて戦いの合間の息抜きを楽しむのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6618j/>

最新鋭機

2010年10月8日15時24分発行